

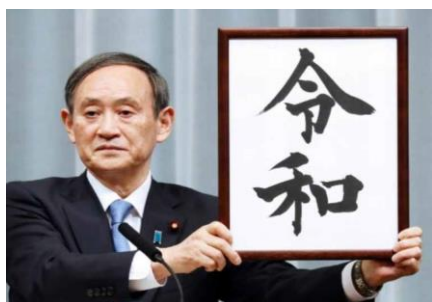


改元の節目に想うこと

いよいよ「平成」という時代が終わり、「令和」の御代の始まりです。平成天皇は昨年末の誕生日の会見で、「平成が戦争のない時代として終わろうとしていることに、心から安堵しています」と述べられました。「平成」はやはり、昭和20年以降の時代の継承という面が強かったし、戦争がなく、日本人が平和と繁栄を享受したという点では、安定の時代だったと評価されることでしょう。

改元にまつわる話題の多い中、代表的な全国紙の「朝日新聞」と「読売新聞」に二つの異なるテーマではあったが、非常に興味ある論考が載っておりました。まずは、朝日新聞 GLOBE に載った三浦俊章編集委員の“何故日本では復興を果たした後も「戦後」なる文字が使われ続けてきたのか”です。

…無謀な戦争に敗れた軍国日本は、新しい日本国憲法のもと、国民主権の民主主義国として生まれ変わった。「戦後」とは、新しい国の出発である。その原点が変わっていない以上、その後の73年間は、継続する歴史的時間としてとらえられるからである。…もうひとつの理由は、再建した日本が経済的繁栄を長く享受したからではないか。…とすると、その二つが終わるとき、(初めて)「戦後」も終わる可能性がある。…平成とは、昭和の果実を守ろうとした時代、守ろうとして守り切れなかった時代だった。過去の遺産を守ろうとする意識が、新しい現実を見ることを阻害し、失敗につながった側面もあるかもしれない。とすれば、次は、新しい時代にふさわしい新しい価値を作るしかない。戦後をただ守ることも、それ以前に復古することも、ともに不可能である。険しい道ではあるが、チャレンジの時代としてのぞむ必要があるだろう。



一方、読売新聞 想う2019 に載った歴史学者山内昌之東大名誉教授の論考では、“転換期 徳川時代に学ぶ”改元の節目に際し、歴史を顧みることの大切さを語っていました。

現代の日本の基盤が形成される第一段階は、明治維新と多くの人が思っているが、徳川家康による江戸入府に遡るのであると。…戦国時代にピリオドを打ち、平和的に日本を統一するために、生産と消費、法、財政や金融の中心としての「江戸」が形成された。東京一極集中や中央官僚の強大化と限界といった、現代日本の強みや弱み、価値観の原型が形成された。…徳川家康が基礎を固めた日本の統一性と国民の一体感が、今日まで続いています。…270年の長きにわたって続いた「パクス・トクガワナ」(徳川による平和)が、明治以降の「天皇の世紀」を静かに平和裏に用意しました。…やや長めの視野から徳川時代を見直す作業は、今日の天皇の代替わりを考える時も、多くの示唆を与えてくれるでしょう。…長い日本の歴史を見ても、どんな権力者でも、権威としての天皇を否定することはなかった。

ポスト平成の「令和」は、どんな時代になるのでしょうか…

